

平成 21 年 6 月 2 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720120
 研究課題名 (和文) キリシタン版羅葡日辞書の原典的研究
 研究課題名 (英文) Comparative Studies of “*Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum*” (1595) Published by the Jesuits in Japan and the European Original Dictionary “*Calepinus*”

研究代表者
 岸本 恵実 (KISHIMOTO EMI)
 国際基督教大学・教養学部・准教授
 研究者番号：50324877

研究成果の概要：

キリシタン版『羅葡日辞書』(1595年天草刊)は1570年リヨン版に近い本文をもつラテン語辞書カレピヌスから見出し・語釈を抽出し、形式を若干改めて、ポルトガル語と日本語の訳を付したものである。日本語訳は原典とその抄訳であるポルトガル語訳に基づいているが、語釈の省略や追加だけでなく、宣教を意識して翻訳されたとみられる箇所がある。また『羅葡日辞書』現存諸本の錯誤と訂正から、原稿作成・印刷の複数の工程で訂正が行われたことが推測される。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	300,000	3,500,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語史、キリシタン版、羅葡日辞書、カレピヌス、辞書

1. 研究開始当初の背景

キリシタン版『羅葡日辞書』(*Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* 1595年天草刊)は、イタリア・ベルガモ出身のアンブロージョ・カレピーノによって書かれたラテン語を見出しとする多言語辞書(以下「カレピヌス」と略記する)に基づき、日本で独自に編纂されたものである。『羅葡日辞書』は、他のカレピヌスと異なり唯一、欧州外で出版され、ポルトガル語・日本語訳を持つ版であり、大航海時代の東西言語接触の産物として、日本語史の分野でも海外のラテン語・

ポルトガル語辞書史の分野でも関心を持たれてきた。だがその原典については、標題及び序文で明記されているものの、その年までに欧州各地で出版されていたカレピヌスが約160種と多数であり、又辞書本文の情報量も膨大であるため、国内外で対照研究はもちろん、原典の版の特定まで調査が行われてこなかった。

またキリシタン語学書としては、日本語史研究で『日葡辞書』とジョアン・ロドリゲス・ツズの二著書『日本大文典』『日本小文典』とが古くから研究の中心的存在であり、近世初期の日本語資料として大いに利用されて

きた。しかし『羅葡日辞書』は『アルヴァレスラテン文典』(1594年天草刊)とともに、ラテン語学習を主目的として編まれたものであること、原典との対照研究が容易でないことから、研究は日本語の用例を抜き出して使うものがほとんどであった。

研究代表者(岸本)は平成13~16年度、科学研究費補助金 特定領域研究「東アジア出版文化の研究」の研究課題「キリシタン版の書誌的研究」の成果として、『羅葡日辞書』が1570年リヨン版の系統を典拠としながら、大幅な簡略化と独自の改変が行われていることを初めて示した。更にこの成果を発展させた内容を、キリスト教宣教師によって各布教地で行われた言語研究を広く関係付けるため新たに始まった、宣教言語学国際会議(第二回、2004年3月於ブラジル・サンパウロ大学)で発表したところ、海外の複数のロマンス語研究者からも大きな関心が寄せられた。

また平成17~18年度科学研究費補助金 基盤研究(B)「多言語辞書データベースに基づくキリシタン文献辞書類の語彙体系の統合的研究」(研究代表者・豊島正之)の研究分担者として、キリシタン版の『羅葡日辞書』『日葡辞書』を、カレピヌスやポルトガルで作られたジェロニモ・カルドージョの羅葡・葡羅辞書、『羅葡日辞書』を主要な典拠としたマノエル・バレットの葡羅辞書などと共に多言語辞書の一つとしてデータベース上で捉え直そうとしつつあった。

このように『羅葡日辞書』と原典との本格的な対照研究は始まったばかりの独創的なものであるが、すでに国内外から注目を受けていた。

2. 研究の目的

キリシタン版『羅葡日辞書』は、イタリア・ベルガモ出身のアンブロジーョ・カレピーノによって書かれたラテン語を見出しとする多言語辞書(1502年初版、以下「カレピヌス」と略記する)に基づき、日本で独自に編纂されたものである。本研究では、同時代の数多いカレピヌスの版の中で最も『羅葡日辞書』に近いと考えられる1570年リヨン版の系統の本文と、『羅葡日辞書』の本文とを比較対照する。

具体的には、第一に見出し語とその下にある説明内容がどのように取捨選択されているかという点、第二にラテン語からポルトガル語訳と日本語訳へどのように翻訳が行われているかという点から調査を進め、原典となった版をさらに絞り込むと同時に、天草版カレピヌス『羅葡日辞書』の独自性を浮き彫りにする。

3. 研究の方法

(1) 『羅葡日辞書』と1570年リヨン版カレピヌスを、A, M, R部および補遺、正誤表を中心に対照させ、内容の取捨選択と改変の実態を探る。

(2) (1)とともに、ジェロニモ・カルドージョの『羅葡辞書』(1570年刊)・キリシタン版『日葡辞書』(1603-1604年刊)・日本イエズス会士マノエル・バレット自筆『葡羅辞書』(1606-1607年写)など同時代の他の辞書とも付き合わせる。

(3) 編纂・翻訳上、興味深い見出しや語釈があればさらに他の国内外の資料と合わせて分析する。

(4) 1570年から『羅葡日辞書』の出版の間には約17種の1570年リヨン系版が現存するが、どの版が『羅葡日辞書』の典拠になった版に最も近いのか検証する。

4. 研究成果

(1) 羅葡日辞書と原典との対照

羅葡日辞書の本編を原典に近い版と思われる1570年リヨン版カレピヌスおよびその増補版1585年リヨン版と対照させて調査を行った結果、以下の①~④が明らかとなった。

①見出しの採用について、原典から固有名詞のほとんどを省いている以外はほぼ網羅的である。さらに、原典の小見出しを大見出しに昇格させていることもある。アルファベット順への語順並べ替えが頻繁に行われており、変化形の表示がしばしば追加されている。

②翻訳について、原典のラテン語語釈及び引用例を検討したうえで必要と思われた要素を抽出しポルトガル語訳・日本語訳を行っている。ポルトガル語訳と日本語訳は緊密な関係にあるが、日本語訳でも原典が参照されており完全な重訳ではない。ポルトガル語訳について、同時代に出版されていたジェロニモ・カルドージョのラテン語・ポルトガル語辞書が使用された確かな証拠は認められない。

③上記①②の傾向について、本編や補遺の間で大きな差異はなく複数の編者の間で編集方針はほぼ一貫していたとみられる。

④1570年リヨン版系統のカレピヌスのうち1585年リヨン版以降のみに含まれる増補部分が、明らかに『羅葡日辞書』に取り入れられたと見なせる例は見つかっていない。

(2) 宣教を意識した原典の改変

キリシタン版『羅葡日辞書』の日本語訳は、ヨーロッパで出版された原典カレピヌスのラテン語語釈に基づいたポルトガル語訳と、原典そのものを参照して作られているが、翻訳が難しいものについては説明を省略したり、ヨーロッパにはない日本の事物に置き換えたりする一方で、独自に語句を加えたとされる例が見られる。それは単に日本人読者の理解を助けるための補足だけでなく、見出し Pascha, ae の訳のようにキリスト教的な意味の語句を加えたり、Obeliae, arum に見られるように古代ローマ神について fotoqe (仏) や butjin (仏神) という語を加えて訳したりするなど、日本イエズス会のヨーロッパ人・日本人両方を含む編者たちが、宣教を意識して翻訳したとみられるものもある。これは、ヨーロッパのキリスト教文化圏の読者にラテン語の規範を示すことを目的としたカレピヌスとは大きく異なる特徴の一つである。

(3) 『羅葡日辞書』の錯誤と製作工程

『羅葡日辞書』現存諸本は、巻末の正誤表や印刷後の書き入れにより一部訂正されているものの、多くの誤りを含んでいる。これらの錯誤と訂正の分析から、原稿作成と印刷の複数の工程で誤りが生じていたこと、訂正作業もほぼ同時進行的に複数の段階で行われたことが推測される。

マノエル・バレット自筆『葡羅辞書』(1606-1607年写)は『羅葡日』を主要な典拠にしているが、『羅葡日』において訂正されている箇所について、訂正前と同様になっているもの・訂正後と同様のものとの両方が見られることから、バレットが参照した『羅葡日』が現存する諸刊本と若干異なっていた可能性がある。

上記(1)(2)(3)の成果は、本研究における『羅葡日辞書』とカレピヌスとの対照からはじめて明らかになったことであり、ヨーロッパ辞書史・日本辞書史を結ぶ重要な意味をもち、新しい学問である宣教言語学の共時的研究展開の足がかりにもなると考えている。今後は『羅葡日辞書』とカレピヌスとの関係からさらに範囲を広げ、バレット辞書、『日葡辞書』やドミニコ会士ディエゴ・コリャードによる『羅西日辞書』(1632年刊)などとの編纂上の関係を明らかにしていくことを目指している。

(4) キリシタンの棄教を表す「ころぶ」という語

キリシタンの棄教を表す動詞「ころぶ」及び名詞形「ころび」という語は、禁教政策が本格化し始めた17世紀初めには、すでに比

喩的な表現としてある程度定着していたとみられる。これは「ころぶ」という語が、『羅葡日辞書』『日葡辞書』により、「落つる」「倒るる」の類義語であり「立ち上がる」の反義語であったとみなせることから、信仰を外圧で棄てるという意味を表すのに適当な俗語的表現とみなされたためと考えられる。内面の信仰を権力によって棄てさせるという弾圧が日本で稀であったことに加え、迫害の規模や峻烈さから、対象をキリシタンに限定した用法が比較的短期間のうちに定着したのであろう。

(5) キリシタンの聖人崇敬

トレント公会議を背景にキリシタン時代日本にも聖人崇敬の教えが伝えられたが、戦闘時に聖ヤコブ(サンチャゴ)の名を叫ぶ習俗や聖書に見えない聖人の伝説なども伝わっていた事実が確かめられることから、キリシタン時代受容されたキリスト教が中世の流れを強く受けていたこと、ポルトガル・スペインの地域色の濃いものであったことが明らかである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

(1) 岸本 恵実、「キリシタンの棄教を表す「ころぶ(転ぶ)」という言葉について」、『アジア文化研究』、査読無、35、2009年、111-123頁

(2) 岸本 恵実、「『羅葡日辞書』の錯誤と製作工程」、『京都大学国文学論叢』、査読無、20、2009年、1-16頁

(3) 岸本 恵実、「宣教を意識した『羅葡日辞書』の日本語訳『訓点語と訓点資料』」、査読有、121、2008年、1-12頁

(4) Kishimoto Emi, “Função do Português no *Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum*, o dicionário trilingüe publicado pelos missionários jesuitas no Japão”, *Revista de Letras* (Universidade de Trás-os-Montes e Alto Douro) II Série, n. 5, 2006, pp. 49-58

(5) Kishimoto Emi, “The Process of Translation in *Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum*”, *Journal of Asian and African Studies*, 72, 2006, pp. 17-26

〔学会発表〕(計7件)

(1) 岸本 恵実、「キリシタンの聖人崇敬」、キリシタン学研究会例会、2009年3月19日、日本女子大学

(2) 岸本 恵実、「キリシタン版『羅葡日辞書』正誤表に関する報告」、東京外国語大学AA共同研究プロジェクト「宣教に伴う言語学」研究会、2008年9月16日、東京外国語大学本郷サテライト

(3) 岸本 恵実、「キリシタンの棄教を表す『ころぶ(転ぶ)』という言葉について」、キリスト教史学会関西支部会、2008年3月8日、関西学院大学大阪梅田キャンパス

(4) 岸本 恵実、「キリシタンの辞書編纂」、国際基督教大学アジア文化研究所第109回アジアンフォーラム、2008年2月18日、国際基督教大学

(5) 岸本 恵実「キリシタン版『羅葡日辞書』の翻訳」、キリシタン学研究会例会、2007年10月27日、聖心女子大学

(6) 岸本 恵実、「原典を通して見た『羅葡日辞書』の翻訳」、第97回訓点語学会研究発表会、2007年10月14日、東京大学

(7) Kishimoto Emi, “The Latin-Japanese translation in *Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* (1595) compared with the European original”, the 5th International Conference on Missionary Linguistics, 14 March 2007, Mérida, México

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岸本 恵実 (KISHIMOTO EMI)
国際基督教大学・教養学部・准教授
研究者番号：50324877

(2) 研究分担者

(なし)

(3) 連携研究者

(なし)